

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

放射線技術科学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:放射線技術科学学科長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック注1など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注2）で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 臨床実習前能力試験を行った 学内実習でルーブリックを採用 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 小テスト、中間試験、ノート提出、イーラーニング、ラーニングボックス、課題提出などを使用して行った ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容

	シラバスに適切な評価方法が記載されている 国試模擬試験全学年で実施した ④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨 学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合が あります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPA は個人指導に用いた 学内実習で確認試験を行った ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学 修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を 促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ガイダンスや個人面談で指導したができない学生がいた
2. 大学単位、専攻単位の学 修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」 に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の 割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入 学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および 大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 1 年生学科専門科目から過去問を解かせ国家試験意識付けを行った ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ル ーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意 識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生意識調査を行った ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生 の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続し ていきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 FD 授業評価を参考に改善を行った ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、 教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 分担して臨床実習病院を訪問し、得た評価結果を活用した ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として 集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程 の改善を図ります。

	☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR と連携を行っている
--	---

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療栄養学科・管理栄養学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医療栄養学科長、管理栄養学専攻長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学修ポートフォリオの活用については、やや遅れ気味であるが、その他は達成している状況 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 小テストについては、各授業ではなく2～3回毎に行われている場合もあるが、その他については達成している。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容

	自分の立ち位置を成績とともに確認できるようになっている。 ④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨 学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合が あります。3 年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入 する。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 3 年次後期ガイダンス時にアチーブメントテストを導入している。ま た、この試験の合格により学外実習を受けることが可能であることを履 修要件に入れている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学 修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を 促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 PDCA 活動を促しているものの活動している学生が少ないのが現状で ある。
2. 大学単位、専攻単位の学 修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」 に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の 割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入 学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および 大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数は 67.5%で あった。アチーブメントテストを履修要件に入れ、改善を図っている。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ル ーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意 識調査により評価します。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 評価尺度を用いた評価は、一部科目について行われている。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生 の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続し ていきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各教員の担当授業毎に授業評価を行い、改善を促している。また、授 業評価の低い教員については、学科長より指導している。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、 教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 4～5 月の卒業生講演時に評価をいただいている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として

	集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 これまでのIR分析結果より改善を図っている。特に国家試験合格と模擬試験との関連について分析している。
--	--

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

臨床検査学科・医療栄養学科臨床検査学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:臨床検査学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 座学では授業ごとに復習、小テストの実施をして振り返りをしている。実習においては、レポートの重要性を理解して作成させている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(合否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 3年生、4年生において国家試験対策として模擬テスト(過去問を含む)を実施している。医歯薬出版、教育協議会模試も実施、学内レベル、全国レベルがどの位置にあるかも含め参考にする。また、苦手科目を克服するために裏解答の実施を毎回する。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるよ

	うにします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生同士が同じ問題を解き、お互いがわからない問題を教え合っている。教員も加わり裏解答作成法がよいかをチェックする。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPA2.0 以下学生の面談を実施して国家試験合格するにはどうしたらよいかを面談している。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 下位学生に対して原因を明らかにして改善するように指導している。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 なるべく休まない、授業に参加する。自宅で各教科 30 分復習することをし指導している。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 苦手科目も克服できるように、教員と学生との連携を大事にしている。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価を分析して教員に何が足りないかを見極め、授業に応用している。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☒遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 実践的に臨床検査技師が病院で患者にどのようにかわるかを実体験して医療人としての自覚を養う。

	⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 e-ラーニング等の活用等の時間を活用している
--	--

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

リハビリテーション学科・理学療法学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:リハビリテーション学科長・理学療法学専攻長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 客観的臨床能力試験(OSCE)は2年生後期、3年生前後期に実施した。学内および学外実習ではルーブリックをもとに評価を実施した。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 小テスト、模擬試験、学習ノート提出、イーラーニングを必要に応じて実施した。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容

	模擬試験、学習ノート提出、などの形成的評価を行い、学生自身の到達度の確認を行わせた。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPAをもとに学外実習施設の配置を検討している。GPAが低い学生に対しては保護者との面談を実施して、学習環境の確認支援を実施した。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各種授業の課題、模擬試験、学習ノートの作成などの評価から、自己の学習を振り返る機会を定期的に設け、特に成績不振の学生に対して学習計画の修正を行わせている。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 1 年次から国家試験の類似問題を解かせ国家試験対策として活用している。毎年実施する全国模擬試験では、おおむね校内平均が全国平均よりも上回っている。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ループリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 全学年に対して意識調査を実施した。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 授業アンケート結果を参考にし、教員が自己評価を行い、授業改善の資料として活用した。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学外実習施設への訪問、実習指導者との会議の場を設け、本学教育

	に対する意見を収集し、改善に努めた。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR部門のデータを活用し、学生支援に対する検討を行った。
--	--

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

リハビリテーション学科・作業療法学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:リハビリテーション学科長・作業療法学専攻長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック注1など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注2）で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法として知識・思考を確認する試験やレポートを用いて確認している。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習の経験をさせている。また、臨床実習ではルーブリックを用いる方法を活用している。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 形成的評価として各授業で小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験を行なっている。総括的評価として学期修了時に行われる定期試験を行なっている。定期試験は可否に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、再試を行なっている。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最

	最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 全学生が授業において概論、評価、治療という段階を踏んで、最終には治療現場における臨床実習を着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が適切に試験の成績により確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置を把握できるようにしている。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPA の活用方法として得点の到達点を明確にして、それ以下の学生には面談を行い、指導補習を行なっている。また、就職先には GPA を利用し、卒業時には GPA の得点により優秀な学生の表彰選出の基礎としている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生に主体的に学習に取り組むようにゼミ形式で卒論指導を行い、国家試験の学習にはグループワークを用いている。また、学校行事や授業では学年単位にて参加できるように自主的な取り組みを促している。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 国家試験・資格試験の成績の指標として、入学者数あたりの合格者数は 39 名中 33 名 84.6%で 80%を超える結果であった。また、新卒合格率は 42 名中 42 名 100%であった。合格率は他の大学と比較して上位となった。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ループリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 全学的な学修行動調査として面談により学習調査を行い、意識調査はアンケートを用いて就職意識などを調査し、評価している。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続し

	ていきます。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 授業にて学生の授業評価を行うように進め、教員の自己評価の機会をもち、FD の参加など行い授業や教育課程の改善を行なっている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 就職先は実習地が多く、本学の教育に対する評価を聞き取り、教育課程の改善に生かしている ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ☐達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学修評価結果や教学についてデータの集積に協力し、それを分析し、科学的根拠に基づいた改善を図っている。
--	---

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療福祉学科・医療福祉学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医療福祉学科長・医療福祉学専攻長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生との面談時、成績について自己覚知を求め、自身の学修について自己評価をしてもらっている。 3年時より年間5～6回の模擬試験の実施。試験ごとの振り返りによる一人ひとりの弱点、苦手科目を洗い出し対応を強化している。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各授業・演習において繰り返し小テストを実施し、未修得箇所を確認するとともに定期試験において、一定水準に達することができるようにきめ細やかな指導を徹底している。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるよ

	うにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各教科の達成度、理解度は定期試験により確認し、できなければとことんできるまで教育を実施し、原級留置者を出さないための取り組みを行っている。234年度においては、初めて1名の留年者あり残念であった。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPA 値については、前後期終了時に面談をする際に教員・学生が互いに確実に確認し合っている。とりわけ科目数をお送り周する条件としての3.0以上が効果的に作用している。とりわけ、複数資格を取得しようとする学生には有効な手立てとなっている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 2024年度の場合、指示されることなく自らすすんで学習に取り組む学生のグループとそうではないグループに大別された。例年はB棟2階のゼミ室を使って真摯に学ぶスタイルの学生群に引きずられ遅れのある学生も動き出してきたが、2024年度はこの動きが非常に遅く、教員の声掛けに対しても耳を傾けなかった学生が多く、結果的に国試を失敗している。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 所謂ストレート合格者の割合であるが、母集団が小さいため、2名の退学者が割合としては大きく響く。国家試験への取り組みとしては、ラーニングボックスの活用も試みるが、人文系学問領域には事例問題が多いため、あまりそぐわない面もあった。他大学との比較では新卒者の国試合格率で後れを取ったことは事実である。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 専攻単位での教育の評価に関しては、毎月のように会議を持ち確認しつつ、各学生へのより効果的な支援のあり方を検討している。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続し

	ていきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 2024 年度は退学者 1 名、留年者 1 名であった。きめ細やかな対応を学生に施し、また、学習意欲に低下した学生には伴走型の支援、寄り添い型の支援を展開するとともに保護者との連携を密にして落ちこぼれの防止に努めている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の就職先との連携を密にしている。県内の社会福祉士会、精神保健福祉士会、MSW 協会の定期総会、学習会を本学で開催することが定期化しており、その際に教員が的確に交流をし、情報交換、意見交換ができており、そこでの指摘についても真摯に受け止め教育に生かしている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 3 年次以降の模擬試験と国試合格の相関、2 年時の GPA と国家試験合格との関連割合などについて、検定にかけるところまで進めている。
--	--

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療福祉学科・臨床心理学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医療福祉学科長、臨床心理学専攻長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ルーブリックは科目によって導入しており、講義科目では知識・思考を確認するためレポート、小テスト、発表を組み合わせています。また技能や態度についても、ディスカッションや発表に即して総合的な評価を行っています。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 講義・演習等では小テストを挟んだり、リフレクションシートへの回答を求めたりすることを通して、学修が期待される水準に到達できているかを確認し、フィードバックを行った上で、最終試験での総括的評価に至っています。また、最終試験にて不合格になった学生に対しては、再試験を繰り返し行い、本人の学習意欲と学びへの執念を高めています。学習意欲の乏しい学生には講義担当教員をはじめ、学年担当教員あるいはゼミ担当教員が個別に指導を行っています。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。

	全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 1年生でチーム医療、基礎心理学を、2年生では臨床心理学の基礎を学修させます。そして3・4年生では実践的な心理学を学修するカリキュラムとしています。1・2年生で人の心の仕組みについて一般的な法則に関する知識や検討する姿勢を身につけます。 実践的な心理学については、2年生の心理実習Ⅰで実習施設指導者からの講義を受け、心理専門職としての態度を身につけます。3年生の心理実習Ⅱではコミュニケーションスキルを高める体験が含まれます。4年生の心理実習Ⅲでは、実際に現場に出て、高い倫理意識や臨床的態度を常に心がけて実習に赴きます。 このように、知識や実践能力に関わる自分の立ち位置を把握することができるようカリキュラムを設定しています。 ④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 臨床心理学専攻の場合は、修士課程に進学して国家資格である公認心理師の受験資格が得られます。大学院進学 of 学修レベルに到達しているかという指標として GPA を活用しつつ進学の指導をしています。 なお、2024 年度より皇學館大学の学生に大学院推薦枠を制定いただきましたが、推薦基準を GPA3.0 以上としています。本学の学生については、特待生枠を設置いただきましたが、本学大学院進学を希望する4年生の GPA3.0 以上(3年生まで)を推薦候補の基準としています。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 小テストの結果のフィードバックや、レポート・卒業論文の指導、心理実習の事前・事後指導を通して、学生には学修行動を振り返るよう促しています。特に卒業論文では、研究計画を立て(P)、実際に調査・分析・執筆を行います(D)。この研究を通して論理的な思考や研究スタイルにどのような問題が存在していたのかを本人自身の批判的思考や指導教員の指摘を通して得(C)、今後の進路・人生の糧とする(A)という、大きな循環を意識した指導を継続して行っています。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)

	上記達成状況の具体的内容 臨床心理学専攻では修士課程修了時期に国家試験を、また修了半年後資格試験を受験することになりますので、国家試験対策に成績を活用することはありません。ただし、先述した特待生候補者になるためにはGPAの基準をクリアする必要があることを、全学年にガイダンスで周知しています。 大学院進学希望者には、3年次のゼミ指導においてGPAを考慮に入れた個別指導を行っています。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 リフレクションシート(感想シート等)を採用している講義については、これらで学生の理解の程度や受講態度を捉え、教育効果を確認しています。また、卒業時に実施する学修行動調査、大学生活における学生意識調査の結果を参考にしています。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価を取り入れ次年度に改善するよう、各教員が積極的に取り組んでいます。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 臨床心理学専攻卒業生は一般企業にも就職していますが、その就職先機関との連携はまだ不足していると言わざるを得ません。しかしながら、福祉関連企業や教育関連企業をはじめ、公務員や教員、医療機関の職員となった卒業生・修了生とのネットワークを構築するよう、各教員は心がけてきました。その結果、就職した学生が媒介者となって企業とのつながりができ始め、来年度には専攻独自の就職説明会(就職ガイダンス)などを実施する計画が立てられています。卒業生や修了生との関係を密にすることを通して、就職先との関係構築を目指しています。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR推進委員会で示された情報を教員間で共有し、教員各自が担当講義において反映させています。
--	---

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

鍼灸サイエンス学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:鍼灸サイエンス学科長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度（ルーブリック注1など）を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験（OSCE 注2）で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 知識や思考力の評価方法は試験、技能や態度についてはプレゼンテーション・実技・実習などを観察し、適切な評価尺度を用いる評価方法を活用しています。評価尺度については、事前に説明し、その学習方法について個別に面談しています。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 形成的評価については、国家試験および最終的総括評価（可否の判定）の2つを重点的に強化しています。国家試験は、学生の習熟度に合わせた実力テスト・模擬テストを底上げを目的として提供しています。総合評価は、必要な水準に達成できるまで、繰り返し実施しています。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において

	て、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 実技・実習科目では、達成度に応じた段階的な教育と評価を行っています。達成状況に遅れのある学生には、個の習熟度に応じた評価を実施しています。講義科目は講義中の段階的評価は行っていないが、面談によって目標達成への学生の立ち位置を把握しています。全科目において、定期試験後、成績不良者に対して再度、段階的かつ反復した学習と評価（トコトン教育）を行いながら、目標達成に向けて関わりを持つ指導を徹底しています。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級・卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 個別および三者面談時の指導において、進級・卒業・国家試験合格の目安として活用しています。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 成績不良の程度によって個別面談を増やし、学生の日常の取り組み状態を把握しながら、自己改善に結びつける活動を促しています。また教育支援者へも報告して、改善に結びつけるための協力をお願いしています。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 2024年度国家試験 入学者数のストレート合格率は、はり師 65.7%、きゅう師 71.4%であった。この期は入学者 35 名中、退学者 4 名、留年者（休学者を含む）7 名であったので、70%を目標にしていた。各々の学習への取り組み方の違いが大きくなっており、個別対応を強化する。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 教育効果を高めるために、学科評価と全学的調査を含めて、評価指導しています。

	③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学科会議及び教育質保証委員会において、学生動態を共有しながら教育質を検討しています。また学生の授業評価に基づき、担当教員の教育改善を継続しています。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 客観的評価はないが、口答による主観的評価や意見を聴取して、教育課程の向上に生かしています。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR での分析結果に基づき、国家試験対策や教育課程の改善に取り組んでいます。
--	---

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

救急救命学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:救急救命学科長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック 注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 試験を点数で採点している。実技については、ルーブリックを用い、評価による差が出ないようにしている ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 小テストを行い、返却している ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満)

	上記達成状況の具体的内容 実習において、毎回、達成するまで行っている。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 グループ分けの資料にしている ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生への記入を促している
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 卒業生未のため、評価できず ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 選択科目の成績を確認している ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 振り返りのアンケートに答えてもらうようしている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 卒業生未のため、評価できず ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ☐達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☒遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満)

	上記達成状況の具体的内容 科学的根拠そのものが難しい問題であるが、変更、修正は行っている。評価において、再試験以降は、ほぼ同じ問題を使用するにもかかわらず、合格に達しない学生について、例えば5回施行して最終的に合格したとしても、最終合格点は60／可となり、何回試験を受けたか不明となるという問題点がある。同じ問題を出題しなければ、合格点に達しない学生の存在に対する対策に苦慮している。つまり、問題を変えると合格できないという点への対策が求められる。
--	---

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

臨床工学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:臨床工学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 知識と思考力の評価は、定期試験とレポートで行っており、技能や態度の評価は、生体機能代行技術学分野の実習で、口頭試問および実技試験の評価にルーブリックを用いている。 学生自らが行う学修ポートフォリオの活用はできていないが、A-portalを用いた活用について検討を行っている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 講義中に小テストを実施し、講義中の重要なポイントと定期試験までに到達しなければならない水準を把握できるようにしている。 また、4年次には、国家試験の模擬試験を毎月1回以上行い、試験ごとの採点結果を学生に配布して苦手分野の把握、国家試験合格までの到達度を把握できるようにしている。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで

	着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 シラバスに講義の各回における到達目標が記載されており、授業終了時、または、科目終了時に「何ができるようになったか」が確認できるようになっている。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 2 年次後期の学修指導、4 年次の国家試験対策でのクラス分けに GPA を活用している。また、各学年の前期と後期に定期面談を実施しており、単位の修得状況と GPA を併せた修学指導を行っている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 担任教員と学生との面談時に、各学年担任が成績(GPA)をもとに修学指導を行い、これまでの学修行動の振り返りを促している。 振り返りから得られた知見から、今後の学修計画を立ててもらい、必要に応じて、基礎力向上のために開講されている選択科目の履修を勧めることで、学修行動の改善を行っている。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 入学者数あたりの合格者数は学科内で共有され、この数字をもとに、次年度の学習指導方法の改善を行っている。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学修行動調査や意識調査の結果は学科内で共有され、技能や態度の教育効果の評価に活用されている。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)

	上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価を各教員が確認し、授業評価の結果をもとにシラバスに改善案を記載するなど、教育方法の改善を継続して行っている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 卒業生に対するアンケート調査および本学卒業生に関するアンケートの結果を学科教員で共有し、教育課程の改善に活用している。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ☒達成(100%) ☐ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR 推進室から提供されるデータに加え、学科内でデータ集積を行い、このデータを活用した教育方法の改善は常に行っている。各学年のGPAを分析することで、学年ごと、さらには学生ごとに合わせた国家試験対策を行っている。
--	--

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療健康データサイエンス学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医療健康データサイエンス学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・知識・思考力を獲得する授業では、eラーニングシステム(learningBOX、A-Portal)を使用し、授業回ごとの小テストへの解答、レポート提出などを実施し、期末試験だけでない評価を取り入れることを行っている。 ・技能や態度を習得する授業では、コミュニケーション能力を向上させるために、各学生がスライドを作成し、作成したスライドを持ち寄り、グループ学習によりスライドの内容を検討し、発表会ではプレゼンテーションをしてもらっている。評価方法は、評価項目(ルーブリック)ごとの基準を学生に示し、学生による投票結果を使用している。また優秀学生に対して、表彰状を渡し、学修の動機付けを促し、学生の投票結果を成績に反映させるなどの工夫を行っている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・ほとんどの授業で、eラーニングシステム(learningBOX、A-Portal)を使用し、授業回または教科書の章ごとのクイズ・小テストへの回答、レポートの提出、資格試験の模擬試験などを行い、理解が不十分な内容については繰返し学修させ、形成的評価を行っている。

	③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・各授業のシラバスに最終的な目標を明記し、授業ごとに獲得できる能力を明記し、学生が自分の水準を把握できるように工夫している。また検定試験がある教科では、外部の検定試験を活用し、水準を確認できるように工夫している。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです。が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・GPA の低い学生に対して、クラス担任が個別に面談を実施しており、学修方法などの相談に使用している。 ・3年後期の研究室配属では、GPA と本人の希望により、卒業研究の研究室配属を決めている。また卒業時には、GPA と諸活動を総合的に判断し、学業優秀者を選定している。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・新入生オリエンテーション、前期と後期の在学生ガイダンスにおいて、学生が自らの学習行動を振り返り、行動計画と目標を建てるために、全学生に「将来設計と生活時間 PDCA シート」(Excel ファイル)を提出させ、自己の改善を促す仕組みを構築し、実施している。しかし、計画を明記できない学生がいる。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	① 各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・卒業時における資格試験の取得者数は、「IT パスポート試験(国家試験)」12人、「基本情報技術者試験(国家試験)」4人、「医療秘書技能検定試験 3 級」21人、「医療秘書技能検定試験2級」17人、「医療情報基礎知識試験」14人、「医療情報技師試験」1 人、「診療情報管理士試験」12人であり、33 人がいずれかの試験に合格しており、入学者数44人あたりの合格者数の割合は79%であった。また合格した試験総数は95であり、一人当たりの平均合格試験数は 2.3 試験/人であった。なお本学科と他大学との比較は、同種の大学・学科がなく、比較は難しい。

	②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・技能や態度への教育効果を計測するために、筆記試験だけではなく、各科目の学習内容に応じた評価尺度を用いている。また全学的な学修行動調査や意識調査に協力し、教育効果を計測している。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・学生の授業評価アンケートへの回答を真摯に受け止め、授業内容を精査し、FD 講演会に出席するだけでなく、FD 講演会の講師を担当させていただいている。またこれらの講演内容に関して、学科会議で審議を行っている。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・学生の就職先へのアンケート結果により、コミュニケーション能力の向上を要望している就職先が多いので、グループワークを含んだ PBL 授業を増加させている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ・全学で実施しているプレイスメントテストと学科独自で実施しているプレイスメントテスト(数学、日本語)の結果を学科の全教員が共有している。そして、その結果を反映し、多くの授業科目の内容を見直した新しいカリキュラムを 2025 年度入学生から実施することになった。また、学科長がIR推進室のメンバーとなり、科学的根拠に基づいた議論を学科会議で行い、教育改善を実施している。
--	--

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

薬学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:薬学科長 村田尚久（大学事務局長）、松永ひとみ（教務課長） 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE)で技能や態度の評価が行われます。 また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各授業にて、評価方法に関してシラバスや授業開始時に学生に示し、総括的評価やルーブリック評価法を用いるなど適切な評価を実施しており、また、OSCE、事前実習などで薬剤師としての技能や態度に関してもルーブリック評価にて判定している。尚、薬学部では、薬学教育評価機構による第3者評価を受審して十分に対応しているため、適切な評価がなされていると考えている。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各科目に関して、各授業シラバスにおいて単位認定評価における「形成的評価」と「総括的評価」を明記した上で、それに準じて授業ごとに評価を実施している。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認

	し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 アセスメンターの活用を学科内で促進しているものの全ての学年の学生に対して十分に活用できている段階となっていない。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA(Grade Point Average)による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更なども含め修学指導に用いる。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPA については保護者も含めしっかりと内容を理解いただくように面談時等に説明している。また、3年次前期修了時点で専門科目の GPA が 2.0 未満の学生は 4 年次の共用試験の合格が厳しい傾向にあるため、3 者面談(学生、保護者、担任教員)を実施し、学習指導に利用している。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 重要な試験などの成績開示時には担任との面談を実施して、学生が学習行動を振り返り、自己の改善に結び付ける活動を促す機会を作っている。
2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 目標値に向けて教員が努力を進めてきたが、目標値を達成することは叶わなかった。国家試験問題の難化があったが、47.2% (昨年度：46.3%) と微増、昨年度に近いストレート合格率を維持した。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 上記の概念で評価に努めている。また、学生の学習などに関係すると考えられる事項については、面談を通して、担任を中心として関係者間での情報を共有化するようにしている。 ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(F 活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価については、できる限り講義内に時間を設けて評価させるように促している。また、FD 研修への参加など、教員の教育に対す

	る自己研鑽も不断に継続している。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 同窓会や学生交流会などで卒業生の体験談など OB との交流の機会を広く設けている。昨年度は6年生に対して複数回 OB による国家試験の体験談を披露する会を設定し、参加学生を対象としたアンケート調査においては高評価を得ている。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 ☐達成(100%) ☒ほぼ達成(実行中・80%) ☐遅れ有(50%) ☐大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 IR 委員より提供のあったデータを基に、学科内で検証し、学生の教育に活用している。
--	---

2024 年度
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

看護学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:看護学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(大学事務局部長) 事務局:教務課	
2024 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 試験やレポートに加え、グループワークでのディスカッションやプレゼンテーションを通して自身の思考を論理的にまとめる力を評価している。技能や態度については、学内演習・臨地実習での達成状況を観察し評価するとともに、適切な評価尺度(ルーブリック 注1など)を用いた評価方法を活用している。学生自らが学修成果を記入する学修ポートフォリオの活用は十分にはできていないので、今後は A-portal の自己評価への記入などにより、活用できるように考えていきたい。 ②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。 「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ほぼ全科目で小テストや課題レポートによる形成評価を行っている。learningBox の活用も増加している。具体的には、看護技術等については学生が具体的なイメージができるように自分の時間で learningBox にある映像教材を確認したり、毎回の授業ごとに小テストを実施している科目もある。さらに国家試験のための模擬テストは各学年の学修進度に合わせ実施している。特に最終学年の4年次は複数回実施している。 ③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認

	認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。 全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 各科目で実施している小テストや事後課題による形成評価の結果は、適時学生にフィードバックし、科目の目標に到達するための支援に活用されている。learningBox の活用も増加し、毎回の授業ごとに小テストを実施している科目もあり、その都度、知識修得の到達度を学生自身が把握できるようにし、科目の目標に到達するための支援に活用している。定期試験後の解説、再試験後の特別教育においては、学生の傾向を把握しながら修得度に応じた指導を繰り返し行っている。 看護専門職として卒業時に求められる看護実践能力の修得を目指し、学科独自の「看護技術の到達度」リストを作成し活用している。「看護技術の到達度」は各科目や実習において学修できる項目と到達目標が明記されており、学生は1年から4年にかけて実習科目ごとの目標到達度を確認し、今後の課題を明確にすることができている。 ④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです。が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 看護学科では、前期・後期セメスターのスタート時に定期的に担当教員が面談を行っている。特に成績不振者に対しては、生活リズムや学習方法の振り返りを行うとともに今後の学習計画指導を行っている。加えて1年次から、年度末の GPA2.0 未満の成績不振の場合、早期からの対応が必要となるため保護者との3者面談を行い、状況の認識を共有するとともに、アルバイト等の調整を含めた学習計画と家族の協力を得られるよう説明を行っている。また、GPA と欠席日数は関係性が強いので、欠席が多い学生、課題レポートが未提出・期日が守れない学生については、科目担当教員と学生担当教員が情報共有して、学生指導に当たっている。4年次からはゼミ担当教員が卒業研究指導とともに国試対策の模擬試験の結果も含め成績不振の学生に対して定期的に学習指導を行っている。 ⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 前期スタート時に A-potal を活用して前年度の振り返りと新たな1年間の学修目標と具体的な行動計画を記載するように指導している。担当教員は前・後期セメスター開始時に、担当学生とその内容を踏まえながら面談し、PDCA 活動につながる支援を行っている。さらに学生サポート記録に記載し、教員間で情報共有ができるようにしている。
--	--

2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針	①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 国試対策セミナーや模擬試験監督など国試対策には看護教員全員が協力して対応している。模擬試験の成績については学生委員会を中心に分析し、担当教員と連携しながら学習支援に役立てている。2024年度卒業生の看護師国家試験合格率 100%(105 名中 105 名合格)であった。保健師国家試験合格率は 100%(29 名)であった。看護師国家試験ストレート合格率 92.6%であった。 ②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 全学的な学修行動調査や意識調査により、夜間のアルバイトやゲームやYouTube 等による夜型生活が学生の出席率や成績に影響していることから、1 年次の早期から学生の面談でこれらについて把握し、担当教員を中心に学習指導だけでなく、必要に応じて学生とともに生活習慣の見直しを行っている ③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の授業評価と教員の自己評価は毎年実施しており、学生の評価を授業に取り入れるとともに、教員の自己研鑽のための FD の定期開催を実施している。看護学科では 2024 年度から医学書院【NEO】を導入し、コンピテンシー基盤型教育の理解を深め、看護学科 FD は「コンピテンシー基盤型教育と授業の工夫～臨床判断能力を育成するために～」をテーマに、各看護学で工夫していることを共有し今後活かせるようにした。 ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 毎年、実施されている卒業時の学生への教育評価アンケート結果は、学科内の教員で共有し、教育課程の改善に活かしている。またホームカミングデイなどを活用して卒業生が来校した際や、実習施設との打ち合わせ会議等で卒業生の状況を確認しながら、臨床側から基礎教育に期待することについて情報収集している。 ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 2024 年度からの総合型選抜入試による入学生も含め、リメディアル教育の受講生の背景や受講状況についての情報を教育質保証委員会や
-----------------------------	---

	担任教員と共有し学生指導に活用している。
--	----------------------